連載

りかことたいちの職場訪問

こんなとこにも組合員⑥

大阪国際がんセンター
腫瘍内科・腫瘍循環器内科　**中川　舞**さん

国内トップクラスの先進的がん治療

大手前庁舎に隣接する大阪国際がんセンター。もともと森之宮にあった成人病センターが移転し、昨年3月にオープンしました。がん治療に特化した病院のため主な来院患者は、地域の病院からの紹介によるがん患者です。近年では、日本在住のアジア系外国人の患者も増え、外部の通訳サービスを通じて患者のケアにあたるなど、看護師業務の多様化も求められています。この病院の腫瘍内科・腫瘍循環器内科病棟で看護師として働く中川舞さんに取材をしました。

母の背中を見て看護師を志す

中川さんは看護師だった母親の影響もあって看護師を志しました。初めは慣れない抗がん剤の扱いに不安な日々を送り、現在は抗がん剤投与や副作用に苦しむ患者の対応に追われています。そんな忙しい日々を送る中川さんにとって、患者が元気になっていく姿がやりがいや喜びになっています。「入院していたときは歩くこともできなかった患者さんが、日が経つに連れ元気になり、退院後に歩いて来てくれたときは、とてもうれしかったです」と話す中川さんの笑顔には、看護師としてのやさしさと強さがあふれていました。

腫瘍循環器内科は、血液の流れなどに関係する臓器のがんを診る科で、全国的にも珍しく国際がんセンターの中でも忙しい科です。命にかかわる仕事でもあり、職場では看護師1人当たりの負担も大きくなっています。患者に寄り添った看護をするためにも、スタッフが増えてほしいというのが中川さんの強い願いです。先日の大阪北部地震や台風21号のときも、スタッフが病院に出勤できず、患者の対応に混乱したことを踏まえ、全スタッフを対象にした災害時の研修等も必要ではないかと、災害時の病院の役割についても危惧しています。

みんなの思いを職場環境の改善につなげたい

働き始めてから、仕事の質や給料、残業時間など、労働条件が気になり、そこで感じる矛盾を自分なりにどうしたらいいのかと考えることもよくあるという中川さんは「基本給が少ないから残業したいなと思うこともあります。でも自分のプライベートの時間が減るので、やっぱり基本給を上げてほしい。もっと問題意識を持って、職場スタッフの思いを聞いて、組合を通じて働きやすい職場環境づくりをめざして発信していきたい」と労働組合への期待を熱く語ります。

そんな思いも持って、今年度から青年部副部長になった中川さんは、休みの日はジムに行ったり、友人と車で温泉に行くのに最近ハマっていて、夜勤明けに食べるラーメンも好きだと笑顔で語ります。夜勤が続くと生活リズムが崩れるので、体を動かしたり、好きなことでリフレッシュするように心がけています。

24時間、患者の命と向き合い、いつも緊張感と隣り合わせの職場の中でも、まわりのスタッフや患者のことを思いやる優しい気持ちや働く環境を良くしたいという強い思いが今回の取材から伝わってきました。

働いて出し

▶大会のしめくくりのあいさつをする塚元青年部長

医療の現場から

府民のいのちと健康を守る府立病院に ⑩

東大阪子ども家庭センター　**前田　治敏**

子どものいのちを守るために

今回は、病院を利用する立場から報告したいと思います。児童虐待問題は大きな社会問題となっています。8月に厚生労働省は、平成29年度中に全国の児童相談所が児童虐待相談として対応した件数は13万3778件で過去最多と速報値を発表しました。そのうち大阪府の子ども家庭センター（児童相談所）での対応件数は1万1306件となっています。

子ども家庭センターでは、児童虐待通告対応の際、傷病のある子どもを緊急に保護し入院治療や検査が必要な場合、病院で一時保護することがあります。

「子どもを守るため」に病院の役割は大きい

一時保護した場合、児童虐待事実の究明をはじめ、家庭や家族の状況把握など、子ども家庭センターと病院の連携が重要です。虐待者から子どもを守るため、面会禁止など医療だけでない特別な配慮が必要となります。

保護した後は、親子関係の調整だけでなく、保護者の育児に対する考え方や育児する力、生活環境、子どもを見守る体制など様々な子どもの安全が確保できるのかを見極めていきます。そのため「治療終了のため退院＝自宅に帰る」とならず、引き続き一時保護を継続する場合もあります。しかし、生活場面をすぐに変更することは子どもにとっても負担が大きいため、入院継続をお願いする場合があります。そうした際、病院にとっては、治療が終了しているのに入院を継続させることは採算性からいうと受け入れがたい話になります。それを協力してくれるのは、まさに病院の「子どものいのちを守るために」という精神によるところです。

社会的責任を果たせる公立病院に

そうした社会的な責任を担う医療の中核となるのは公立病院です。そもそも採算優先の民間病院では対応が難しい、特別な事情や傷病に対応するために公立病院が存在しています。

その意味でも、府立の病院が独立行政法人化され、採算性を重視する病院経営が進められていることは、府民にとってもマイナスです。府民によりよい医療を提供できる公立病院に戻すことが必要です。改めて、病院で働くみなさんと一緒に、がんばっていきたいと思います。

進行をする加藤書記長

チームでアクションを考え中

役員紹介をする中森前副部長

ひきつづいての交流会

カジノはいらない！カジ

交流のつどい～

アルな説明をした上で、「カジノはいらない」と力強いあいさつを行いました。

その後の講演では、「カジノ成立 今後の闘い」と題して、阪南大学桜田教授が、カジノの危険性と今後の法的手続きが重要であることを説明しました。保険医協会からは、学校での健康診断後に未治療の子どもが多く、歯科治療ができず口腔崩壊している子どもが一つの学校に何人もいる実態や、眼科での治療がされず教室で席替えができない、板書をあきらめるなど学習意欲が低下している子どもが増えている実態が報告されました。他にも、保育士が欠員でも将来の保育所廃止見込みを理由に補充しない実態、奨学金の返済が就職後重くのしかかり将来への不安を抱く青年が増えている実態をはじめリアルな報告がされました。府政が担うべき福祉や医療、教育の充実こそが必要だと各団体が訴えました。